

國學院大學學術情報リポジトリ

現代における人生儀礼の地域性とその変遷：
茨城県の七五三とホテル・旅館に関する調査を中心
に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田口, 祐子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001441

現代における人生儀礼の地域性とその変遷

—茨城県の七五三とホテル・旅館に関する調査を中心に—

田口 祐子

論文要旨

現在さかんに実施されている子どもの成長を祝う儀礼とされる七五三^{しちごさん}は、他の人生儀礼^{じんせいぎ}同様、戦後、特に高度経済成長期にみられた急激な生活変化によって、大きな影響を受けることとなった。そして儀礼の中にみられた各地域の多様性は失われ、画一的な形が推し進められることとなった。本稿で取り上げる茨城県の一部地域にみられる、ホテルや旅館を利用した盛大な七五三の祝いをする事例は、こうした多くの儀礼の画一的な流れとは異なる特殊な例といえる。本事例の実態や背景を明らかにすることで、現代^{げんだい}の七五三、さらには人生儀礼を考える上で重要な視点を得られるのではないかと考え、本事例の祝いの場であるホテル・旅館への質問紙調査を実施した。調査結果を通じて、現在の人生儀礼と地域性^{ちいきせい}、儀礼産業^{ぎれいざんぎょう}の影響とその動向についてみていきたい。

現在子どもに関する人生儀礼の一つとして、七五三は広く盛んに実施されている。筆者が東京足立区で子育て中の母親172人に実施した平成23年（2011）の質問紙調査では、「お子様の七五三のお祝いをしましたか？」とした質問に、94.8%が祝ったと回答していた。¹⁾

七五三の現況をみていくならば、「11月15日を中心に子を盛装させて社寺参拝し、家族で祝い記念写真を撮る」といったことが、現在の全国的に共通した七五三の姿といえる。²⁾しかしこの全国的に類似の形でみられる七五三の祝い方は、古くからのものではない。

七五三やそれに類する子どもの時期の人生儀礼については、民俗学における調査事例が多くみられる。地域によって報告されている内容は多様で、例えば厄年として神事の神役をつとめたり、神社で氏子札をもらって村の一員としての承認を得たり、髪型や衣服を一定のきまりに従って変えたりといったことがみられた。これらとともに、場が設けられて、家族・親戚の他、地域の多くの人に向けた成長した子の披露や共同飲食も多くみられた。

しかし、戦後、特に高度経済成長期の急激な生活変化にともなって、日本人の生活を取りまく客観条件が一変した結果、人の一生の節目に行なわれてきた人生儀礼の内容にも、重大な変化が生じることとなった。色川大吉は、この変化のポイントとなることを5つにまとめ、①「家」の外での儀礼の実施（通過儀礼の外化現象）、②地域共同体に代って会

社やコマースリズムが私的儀礼に参入、③直系家族の減少による儀礼の伝統的様式の継受困難と礼式の混乱や衰退、④情報化社会の深化によるライフ・スタイルや時間の均質化と多様性の喪失、⑤平均寿命の伸びによる節目観の変化、とした。³⁾ 色川が昭和61年（1986）に指摘した、この人生儀礼の変容に関する5つのポイントは互いに関係し合いながら、さらに進行することとなり、本稿で取り上げる七五三についても、地域ごとの特徴が失われて規模は縮小し、全国的に共通した形をとるようになっていく。

そういった中、一般的な七五三の形とは異なる極めて特殊な事例が茨城県においてみられ、現代の人生儀礼における地域性を示す珍しい例となっている。⁴⁾ ここで注目する地域性の中核は、現在の七五三ではみられなくなってきた、多くの場合飲食を伴う、社会に向けられた承認や披露に関する要素である。

現在の七五三では、先述のとおり衣装や社寺参拝、写真撮影が主に家族といった単位の中で行なわれているが、かつてはそのことを通じて承認や披露といったことが重視され、家族とともに親戚、地域の広い範囲の者たちによって祝われてきた。そのような外に向けられた承認や披露の要素は、戦後の生活変化の中、外部の施設やサービスを利用（以後、外化とする）しながら規模を縮小させていくこととなるが、外化していく中で逆に承認や披露の要素を強めたものが、本稿で注目する茨城県における「七五三披露宴」である。この名称は結婚披露宴のような盛大な様子から、女性週刊誌や情報誌によってつけられたものだが、その特異性と華やかな様子からたびたびメディアによって取り上げられてきた。

本稿では、現代において顕著な地域性を示す茨城県における「七五三披露宴」に注目し、その実態と背景の把握を試みる。このことを通じて現代の七五三全般を考える上で重要な視点を得ることができるのではないかと考えている。方法として、戦後の茨城県における七五三全般の変遷を確認するとともに、「七五三披露宴」の主な実施場所となったホテルや旅館に⁵⁾ 質問紙調査を実施、その結果に基づいて論じる。

第1章 茨城県における七五三の特徴

本章ではまず対象地域である茨県の特徴を概観し⁶⁾、続けて本地域における高度経済成長期までの七五三の様子を確認していきたい。

茨城県は関東地方東部の太平洋側に位置し、県央・県北・鹿行・県南・県西の5つの地域に区分されて説明されることが多い。この5区分の中で古くから行政、経済上また文化的に中心的な役割を果たしてきたのは、水戸市を含む県央（水戸市、笠間市、東茨城郡等）である。現在でも同様な位置づけとともに、太平洋側には多くの観光客でにぎわう海水浴

場や県有数の沿岸漁業の基地がある。県北（日立市、高萩市、那珂郡、久慈郡等）は阿武隈山地の山々や、そのふもとに久慈川、那珂川などがあり自然豊かな地域となっている。原子力発電所の全国第一号設置や電気関連産業の発展があった一方、山間地域は農業的な土地利用の難しさ、炭鉱閉鎖等による人口減少、そして経済的衰退等の問題に取り組んでいる。鹿行（鹿島市、潮来市、銚田市、行方市等）では、昭和40年前後から開発が始まった鹿島臨海工業地帯で鉄鋼や石油化学など工業化が進んでいる。霞ヶ浦や北浦の水郷特有の観光名所を有する他、稲作が盛んであり、またメロン栽培も有名である。

県南（つくば市、土浦市、牛久市、稲敷市等）で昭和60年に行なわれた筑波万博は、農業県のイメージを一新させたといわれる。過密化した首都東京からの研究諸機関の移転など計画的なまちづくり、広域の新興都市が形成されている。その他工業地区、利根川に面した稲作を中心とした農業地区がある。県南同様常総台地が広がる県西（古河市、筑西市、結城市、猿島郡等）では、古くから畑作中心の農業がさかんであったが、その利便性から首都圏に向けた近郊農業地帯として、集約度の高い農業経営を行なっている。県南・県西両地区では、多くが東京から50キロ圏内に含まれ、一時期大幅な人口流出が起こった。その後工業の分散化や住宅団地の造成、交通網の整備により、東京の通勤圏となり、逆に急激な人口増加がみられた。

藤田稔はこういった地域特性をもつ茨城県について、地形との関係から人間の生活文化を捉えることができるとし、3つの民俗地域に分けている。⁷⁾ 3地域とは、那珂川の線を境とする北部、霞ヶ浦・北浦の湖沼や平野を中心とする南東部、小貝川・鬼怒川を境とする南西部であり、様々な民俗事象をこの区分にあてはめて説明している。

子どもに関する民俗事象についても、2月8日に行なわれる子どもの祝いをこの区分で紹介している。2月8日は田の神の去来と関係が深く、年中行事に関して重要な日とされるが、子どもの成長を祈る儀礼も行なわれてきた。北部ではエリカケモチといって、丸めたもちを数え年より1つ多い数だけ麻やつるに通して、7歳までの子の首にかける。那珂川以南ではショイモン、セマモリといって餅を背負わせるところが多い。この時期の子と餅に関する民俗事象は北部と南東部にあって南西部にはない。本稿のテーマである七五三についても、3地域区分を参考にして、主に郷土史にみられる記述から整理してみたい。⁸⁾

現在のいわゆる「七五三」というような名称は、昭和の初め頃までは「オビトキ」「ヒモトキ」（以後、オビトキと総称する）とよばれ、昭和40年代頃名称が七五三に変わったとする捉え方が多い。南東部、南西部（先の行政区分では、南東部が県南と鹿行、南西部が県西）でこの名称の祝いをすることが多い。また南東部の中でもさらに南側の方がさかんだったとする記述がみられる。

南東・南西部の特徴として、11月15日に長男長女が7歳になると実施したとする例が多い。数日前から組合や人に頼んで家で餅を搗き、サイソクモチやヒゲコモチ、オビトキモチと呼んで招待する家に前もって配ることがみられた。参加者は、親戚・仲人・産婆・近所の人など多人数であることが多かった。嫁の実家から晴着等を送るなどの負担がほとんどの地域でみられた。サイソクモチをもらった人も反物や金子等包むことがあり(神野町)、招待する側もちろん招待される側も、大きな出費となったという。町ではヒモトキワイはご祝儀(結婚式)同様、あるいはそれ以上に費用がかかったと言われ、里方・婚家では一反歩ぐらいの土地の収穫物を積み立てておいたという(東町)。女兒の祝いには「女は結婚式を二回するようなものだ」と言ったりしたともいう(牛久市)。

現在の鹿行地区にあたる神野町、麻生町では質素に執り行う「七の膳」(7人が祝いの席につく)が儀礼の中心だったと考えられ、多くの人を呼ぶ宴会には直会という意味合いがあったとする。これらの儀礼の合間には、お宮参り等行うのが通例であったが、氏神、鎮守、観音、家の神様等多くの神仏に姑や親と共に参りする。

南西部では、オビトキは似たように実施されていたものの、主催者の祖父母の意向、経済力などによって実施の有無や方法が異なっていたとされる記述が多くみられる。家によっては、戦前は現在の七五三ほど華やかではなかったとする。一方、「帯解き子がいると大変だ」(三和町)と祝いの大変さを語る記述もみられる。総和町では、オビトキの祝いはその内容も参加者も「地味」なもので、多くはお金をかけず、呼ぶ人数も少なかったという。どの家でもお金をかけるようになったのは、都会の風俗がメディアをとおして視覚的に伝わってきたからだという。また同じく総和町では古く享和2年(1802)の上砂内村で、ある裕福な家でのオビトキに招かれた人々の名前と祝いの品の記録が残っている。家族の他、村内の親類や産婆、隣町からも親戚などを呼び、それぞれから銭、金、棧留、生地、帯地などをもらい、さらにそれぞれについて礼を尽くしたとする記述がみられる。この時期の裕福な家におけるオビトキの様子を知ることができる。

祖父母と関連する記述として、南東・南西部ではシンショウワタシ⁹⁾として後継者が家業の経営能力を持つ頃や、社会的地位が向上する頃に家長の引き継ぎがなされるとする慣行が広くみられるが、この時期はちょうど一番上の孫が7歳の頃でもある。こういったこともあり、シンショウワタシとオビトキを重ねて説明する記述が多くみられる。後述するホテル・旅館の調査でも、「七五三披露宴」の意義を後継ぎ披露や代替わりとして説明する例がみられた。5章で再度取り上げて考察していきたい。

さてオビトキは3地域のうち、南東・南西部にはみられるが、北部ではほぼ聞かれない。北部でみられる子どもの成長儀礼として、オショウジン・ゴダチという主に5歳男児を対

象とした精進潔斎の儀礼がある。夏の土用中の7日間、男児が父親とともに、期間中毎日白装束を着て河や沼で儀礼にのぞむのである。修験者の関与があったとみられ、昭和初期まで残存していたという。ゴダチ習俗は、那珂川と久慈川の間に分布し、他にテイザとよばれる囲炉裏における主人の座の名称分布の他シブヌキ、大助人形、先のエリカケモチと同様の分布圏をもつ。オショウジン等がみられる北部について、藤田は北・南からの民俗文化が久慈川と那珂川とにはさまれ、古い形で温存されたのではないかと注目している。

第2章 茨城県の七五三にみられる外化傾向

郷土史で多く報告されているオビトキは、昭和40年迄みられた。本章では郷土史、筆者の現地調査より、高度経済成長期以降の茨城県の七五三の変遷をみていきたい。

オビトキは長く自宅で行われ、祝宴の準備のために料理番や近所の手伝い人などをよんでいたが、昭和40年代より、自宅ではなく旅館や料理屋を利用することがみられるようになった（神野）。猿島地域で長く写真店を営む方によれば、それまでオビトキといわれていたのが、七五三と呼ばれるようになったのは昭和40年代以降であったという。

この時期の七五三の様子について、今泉町の詳細な記述がある。自身の孫を平成15年に祝った際のこととして、「今泉では七歳の祝いを盛大に祝ってきた。町内中の人が招かれ、昭和50年頃までは村親戚・組近所のお手伝いを頼んで、自宅で行ない、大変なので、その後料理屋やホテルで行うようになった。男女にかかわらず、上の子が数え7歳になると下の子も合わせて祝った。私宅の孫は平成15年10月末、上の孫（女兒）、下の孫男児、ホテルで行った。仲人、里方の祖父母、親戚、町内の皆さん（七五三は女性の出席が多い）を招いて祝った。結婚披露と同じであるが、料理に汁粉が加わり、引き出物に祝い餅が加わるので、その分お金がかかる」。「結婚披露」とした表現から、これは本稿で注目している「七五三披露宴」の様子を示したものと考えられる。

また、上記と同じ人物の長男の祝いの様子として、「自宅でオビトキ祝をしたので、組・近所の女性のお手伝いをいただき、料理を作った。さと芋の煮ころがし、きんぴらごぼう、ハスの煮物、天ぷら、酢の物などを作り、魚屋から刺身、笹折（折詰）、肉屋からトンカツを買った。料理には、汁粉が出される。夕方、子どもたちが学校から帰る頃、子どもたちを招いて「汁粉ぶるまい」をした。子どもたちには菓子なども出した。私は下働きの裏方で、今のように親も着飾ってなどということにはなかった」という。この当日の祝いの他、招待する人用の餅（オビトキモチ）を大量に準備するため、組・近所の男女で餅つきをしたといい、大変な重労働だったという。¹⁰⁾

三和町では平成元年頃のオビトキについて、「11月15日前後の日曜日などに、晴着を着せ、写真撮影し、鎮守に参り、親元などを回る。祝宴を開き祝品を披露する。親元からの祝品は、晴着（和服なら女兒の振袖や袴、男児の羽織袴。洋服なら入学式用のドレスやブレザー・スーツ）を中心に、入学用品一式（机椅子・ランドセル・自転車・本棚・千歳飴・学用品・ベッドなど）。祝宴は「結婚式みたい」といわれるように、料理屋で親戚・分本・仲人など多数を招待して、子どもに色直し（振袖→ドレス）させ、会食・アトラクション後に数種の引物を出す、など施設化とともに派手になりつつある」としている。¹¹⁾ これらの記述のように、自宅にかわって宴会の場となったのは、旅館・ホテル・料理屋であった。

また、昭和40年以降外のサービスを利用し、外化していくようになる前の昭和30年頃には、これとは別の方向からの外化もあった。深刻な農村恐慌から朝鮮戦争の時期、家計費と並ぶ冠婚葬祭費の増大が強く意識されるようになり、「新生活運動」の掛け声による生活改善運動が始められた。県民の間に「冠婚葬祭の簡素化」運動が盛り上り、県内の全市町村に波及するに至った。¹²⁾

そういった流れの中で、市町村が主催する形で家ごとのオビトキを行わずに地区の会場（公民館・小学校）にまもなく就学する子どもたちを集めて行う、「合同紐解き祝い」¹³⁾ が行なわれるようになった。総和町で実施された昭和30年の祝いには562名の参加児童があったという（該当児童は585名）¹⁴⁾。

他にもこの時期大和村、潮来市、三和町、猿島町においても、同様の祝いが実施されていたとする報告がある。しかし「合同紐解き祝い」は、数年で行なわれなくなる。猿島地域で自身もこの祝いに参加したことがあった女性は、合同で行う以外に結局家でも祝うことになり、二重で祝うため簡素化の解決にならなかったからではないかと語る。また、昭和30年代までのテレビや洗濯機の普及といった身の回りの生活の変化、兼業化への動きは、冠婚葬祭に対する人々の捉え方も変化させていった。このことによる変化は、ホテル・旅館を祝いの場として利用するという七五三の外化傾向を推し進めたといえる。

第3章 新たな祝いの場となったホテル・旅館の動き

次に人生儀礼の外化状況を、ホテル・旅館の側から確認する。方法として、旅館・ホテル業界誌で、昭和39年発行の『月刊ホテル旅館』¹⁵⁾ の「宴会」関連記事を主に使用する。高度経済成長期以降のホテル・旅館における「結婚式」「披露宴」をはじめとした人生儀礼の実施内容や動向を、特に七五三関連記事に注目しながら整理する。また茨城県のホテル・旅館に関する記事についてもその内容を確認する。そしてこの他、昭和40年以降の地

方紙『茨城新聞』の七五三に関する記事や広告も参考にした。¹⁶⁾

『月刊ホテル旅館』は10年ごとに区切って記事を整理していくこととする。まず1960年代(発行年の昭和39年～44年)は「宴会」部門¹⁷⁾に注目した記事がいくつかみられ、「ちょっとした旅館でも皆大広間を持つようになっている」(昭和39年11月号)としている。60年代半ばには、結婚ブームがあり、結婚式やその披露宴のためのホテル・旅館利用例が記事にみられるものの、その数は驚くほど少ない(婚礼に関する特集記事は3件)。その中に「宴会屋は商売として、ゆりかごから墓場まで人生のあらゆるセレモニーがやれなくては一人前とはいえない」(昭和43年2月号)といったような人生全般を対象としたセールスの考え方を提示した記事がみられた。七五三や茨城県のホテルに関する記事はこの時期皆無であった。

『茨城新聞』では、この時期毎年必ず11月に晴着を着た子どもと家族の社寺参拝写真とその記事が掲載され、参拝の様子を簡単に紹介する内容となっている。昭和40・42年には先述の市町村実施の七五三の合同祝いの記事がみられ、服装の簡素化や合理化への呼びかけの動きを確認できる。一方で「年々豪華になる」といった簡素化に逆行した記述もみられる。「七五三披露宴」に関する記事はみられないものの、昭和40年11月15日の「県民の声」欄で、筑波郡の読者が農家で盛大な七五三の様子について、農村の楽しみであると同時に見栄や形にとらわれ過ぎて他の生活までが犠牲になっているとした投稿をしている。

ベビーブーム、オイルショックから始まる1970年代(昭和45年から10年間)、結婚ブームは前半で終わるものの、ホテル建設は全国的に進み、利益回収率の高い宴会部門開拓への熱はより一層強まる。『月刊ホテル旅館』の中でも婚礼に関する記事の占める割合は大きく、後半には披露宴の演出方法に関する記事がみられ始める(昭和53年6月号)。この時期、茨城のホテル・旅館を扱った記事は7件で、そのうち成田空港や鹿島工業地域の開発にともなった新築ホテルについてのものが3件あった。いずれもこれからますます発展する地域において高い需要が見込まれるとする中、特に地元の宴会部門に注目している。

また、茨城県ではないものの成田空港近くに開港前に営業開始した千葉県成田市のホテルの記事がある。開港までの取り組みの柱として「地元攻略」をおき、例えば地元の各種年中行事(七五三の祝、米寿の祝など)に取り組んでいるとする(昭和52年6月号)。具体的には11月に子ども向け「七五三」パックを発売、家族中心の内容を盛り込んで、1人当たり単価13000円だという内容が紹介されている。しかし『茨城新聞』では、通常の宿泊や結婚式、忘年会・新年会等に関する広告はあっても、七五三に関するホテル・旅館の広告は皆無であった。また、60年代にはみられた神社や写真館、呉服屋、デパート、カメラ(フジカラー)の広告が、70年代になるとフジカラー以外みられなくなる。

1980年代（昭和55年から10年間）に入ると、『月刊ホテル旅館』では婚礼特集が盛んに設けられる。競合する専門式場、公共会館、互助会系勢力のデータ分析、それに対する提案記事、披露宴を盛り上げる照明や音響、ケーキや料理、ゴンドラといったような新設備等の紹介記事が目立つ。一方、婚礼以外のイベント企画に力を入れようとする流れも若干ながらみられる。ホテルが人の一生に関わる場所を提供できるとし、「ライフスタイルマーケティング」として多彩なイベントを企画、「子供の誕生会」「入学・卒業祝い」「七五三の会」の事例記事もある¹⁸⁾（昭和57年11月号）。

この時期、茨城県のホテル・旅館については、8件の記事がみられる。そのうち6件は昭和60年に開幕したつくば市の科学万博に関連して、新築あるいは増改築したホテル・旅館についてのものである。ホテルの建設ラッシュの中、生き残るための工夫やアイデアが記事となっている（昭和59年8・12月号、昭和60年1・2・12月号）。

『茨城新聞』では80年代まで、七五三の参拝写真の掲載記事が毎年みられる（90年代以降はそのペースが毎年ではなくなっていく）。この大きな写真付きの記事は、定型化しており、当日の天気や人出、晴着の動向という内容で構成されている。ただしこのタイプの記事には、「七五三披露宴」に関する記述が全くみられない。

1990年代（平成2年から10年間）、『月刊ホテル旅館』では「ここ数年宴会セールスは好況」（平成2年2月号）とする中で、特にブライダル市場の好況に言及する記事がみられる。一方婚礼以外の祝事の開発が必要とされ、その中に「房総半島では七五三祝いが派手だ」とする記事がみられた（平成2年4月号）。千葉県における「七五三披露宴」に関する記述と考えられる。

『茨城新聞』でも、平成2年11月15日の「いばらぎ春秋」欄で近年の七五三についての所見をのせているが、その中で「豪華で高価な身なり、一流のホテルを会場に結婚披露宴も負けそうな七五三披露もあるそうだ」とする記述がみられ、両媒体にて初めて「七五三披露宴」が出てくることから、この時期注目を集める形で実施されていたことが考えられる。

この1990年代も『月刊ホテル旅館』では、宴会に関する記事は大半が婚礼についてである。平成5年の記事には不況の中、収益の減った宴会部門の今後の対策として、個人利用に向けたものがみられる。その中に子どもの数の減少により、一人の子にかける金額が増大すると想定し、七五三の祝いをおす記事がみられる（平成5年3月号）。またこの時期後半から『茨城新聞』では、先述の写真付き七五三記事がみられなくなる一方で、読者参加ページに投稿された我が子や孫の七五三の写真がみられるようになる。七五三が社会的な関心事ではなくなり、プライベートな扱いへと変化してきた様子がうかがえる。

バブルも崩壊した2000年（平成12）以降、宴会需要の低迷はホテルにとって最大の問題であるとする記事が多くみられるようになる。一方需要は低迷してきているものの、工夫次第で最も利益をあげやすいのも宴会部門とし、多くのホテルが団体・個人、一般婚礼とそれぞれの立地条件や規模等に応じた試行錯誤を続けている（例えば婚活パーティ）。

茨城県のホテル・旅館の記事として、以前は婚礼に力を入れていたが、これからは一般宴会や個人の集まり、中でも「家族の記念日」を祝う場所としてのイメージ確立をめざしたいとする水戸のホテルの例が掲載されている（平成24年3月号）。

以上より時期による変動はあるものの、ホテル・旅館ではその設備を利用した結婚式や披露宴は行なわれ続け、さらなる営業政策として七五三をはじめとした個人や家族に向けた人生の節目の祝事への拡大が図られてきた流れがみられた。特に茨城県の場合、こういった流れとともに昭和40年前後の鹿島コンビナートや成田空港建設、昭和60年の筑波万博実施のために建てられたホテル・旅館がその後の経営維持のために行なった模索と、第1・2章で述べた茨城県の一部地域における大掛かりな七五三祝いの外化の流れの重なりがうかがえる。しかし、直接の関係を示す記事はみられず、「七五三披露宴」の実態や背景をつかむにはいたらなかった。

第4章 茨城県のホテル・旅館への七五三に関する質問紙調査

茨城県における「七五三披露宴」を含む七五三に関するホテル・旅館利用の実態把握を目的に質問紙調査を実施した。

調査対象は大手旅行サイト「楽天トラベル」¹⁹⁾登録の茨城県内ホテル・旅館380ヶ所のうち、「宴会場」をもつ176ヶ所とした。時期は平成28年1月27日から2月29日である。

方法は、対象とした茨城県内のホテル・旅館に、調査の内容や目的、主な質問事項を記した調査依頼文を送付、後日承諾を得てから電話にて10分程度の質問調査を実施する、というものである。有効回答数は114ヶ所（176ヶ所中）であった。

主な質問事項は、七五三に関する「利用の有無（現在と以前）」「件数動向」「利用の時期」「利用メンバーの構成」「七五三披露宴の実施有無とその内容」などである。

本調査の結果を、以下に述べていくこととする。

(1) 茨城県における七五三の実態

調査では、まず七五三全般の利用の有無について聞いた（すべての利用形態を含む）。現在の利用については、「あり」42件で、「なし」57件であった。以前（時期としては特定

図1 現在と以前の七五三利用有無（件数）

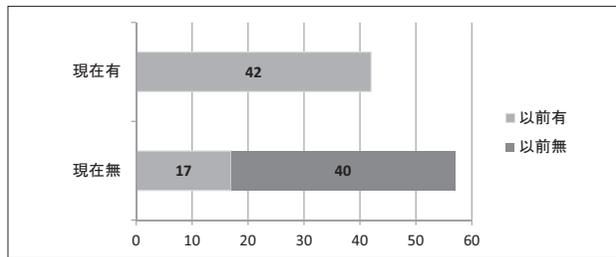


図2-1 地域別の以前の七五三利用有無（件数）

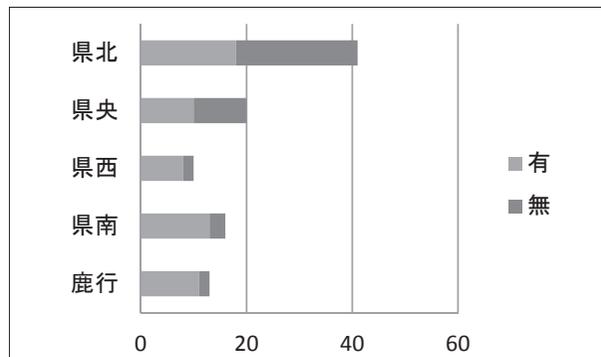
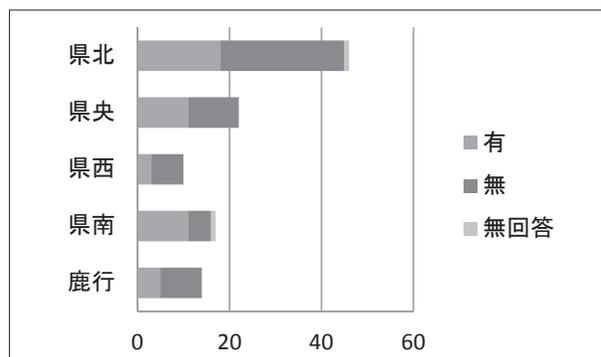


図2-2 地域別の今の七五三利用有無（件数）



せずおおまかに今より前)の利用については、「あり」59件、「なし」40件であった。この今と以前の利用有無の関係についてさらにみていくなれば、以前利用「あり」の59件の内、今も利用「あり」は42件、「なし」が17件であった。以前は利用のなかったところで、新たに現在七五三で利用されることはなく、七五三に関する利用が前からあったホテル・旅館の中に利用がなくなったものがでてきていることがわかった(図1)。

七五三の利用の有無について、他の要因との関係をみていきたい。ホテル・旅館の所在地を中心に、併せて年数、規模によっても確認していくこととする。所在地について、地

図3 参加メンバー

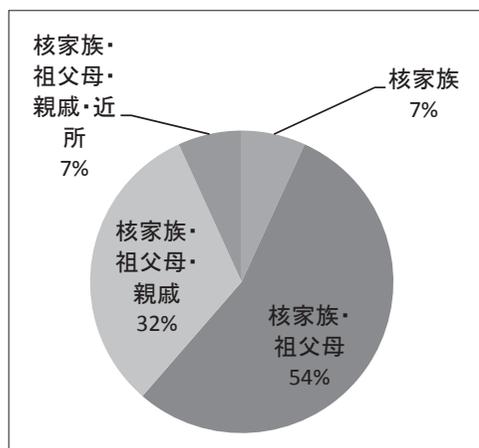
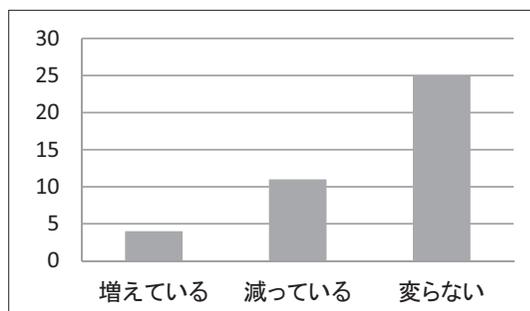


図4 七五三の件数動向



域ごとに分けてみるならば、図2-1、2-2のようになり、地域ごとに件数動向の特徴があることがわかる。以前は七五三利用率が大変高かった県西と鹿行は現在大きく減り、同じく利用率が以前も高かった県南は若干の減少傾向、そして以前の利用率が比較的低かった県央と県北は件数維持傾向といえる。

本調査協力ホテル・旅館の創業年数に関しては、1980年代から（30年前）が最も多く、1960年代から（50年前）がそれに続く。また、部屋数からみた規模は10～30室が多く、全体の62.5%であった。これらの創業年数や部屋数の傾向は、所在地との関連が強くみられた。が、いずれも回答数が少なかったことから、詳細な検討は試みなかった。

次に現在七五三利用「あり」の場合の実態についてみていきたい。

時期は10～11月に利用していることが大半を占めた（これ以外は1件のみであった）。参加メンバーは「核家族²⁰⁾・祖父母」が半数を占め、「核家族・祖父母・親戚」が全体の3分の1、さらにこれに近隣の人を合わせた場合は3件のみであった（図3）。

現在の七五三利用内容としては、先のメンバーが集まって昼に「会食」という形が大半であった。現在の利用内容の様子については、例えば「今は身内だけで規模の小さなお食事会が多いようだ」（県南・つくば市）、「鹿島神宮の帰りにご家族で会食が多い」（鹿行・鹿島市）といったものがある。

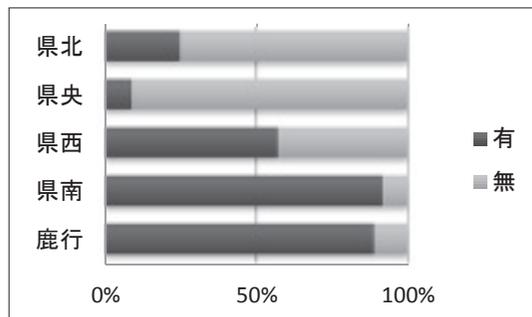
七五三に関する利用件数に関しては、以前とかわらないとすることが多かった（図4）。この件数に関する回答では、数は同じだが規模が縮小したとする声が多く聞かれた。

現在の実態を時期、メンバー、内容、件数動向でみてきたが、これらを整理してみると、件数や時期に大きな変更はないものの、祝いの規模が変わってきた、10～11月に核家族・祖父母で「会食」という形で利用することが多い、県北と県央では低い利用率が維持され、

図5 「七五三披露宴」実施ホテル・旅館分布図
 (調査実施ホテル・旅館所在地に「・」、その内「七五三披露宴」
 実施あり「◎」、実施なし「×」)



図6 「七五三披露宴」実施地域



鹿行・県南・県西は元々高かった率が減ってきている、ということがいえるだろう。次節では「七五三披露宴」実施状況について、自由回答内容を中心にみていくこととする。

(2) 「七五三披露宴」実施の有無と明らかになったこと

「七五三披露宴」をこれまでに実施したことがあるとしたのは、19ヶ所であった。逆にそういったことをしたことがないと明言したのは、18ヶ所であった。

これを図示したのが図5、6である。実施地域は、「実施あり」が鹿行・県南・県西、「実

施なし」が県北・県央とわかれた。特に鹿行・県南の実施率が高く（約9割が実施）、県西も5割越が多い。このうち、現在も実施としたのは石岡市（県南）の1ヶ所のみであった。「七五三披露宴」について、その内容を詳細に語った17ヶ所のコメントを整理していく。いずれも地域は鹿行・県南である。

「元々七五三盛大に祝う土地柄。結婚披露宴並みに。ホテルの営業の柱にもなっていた。」（県南、石岡市）

「昔は七五三の時期イベントもやっていたが、今はやってもあまりこないのでやめてしまった。結婚披露宴みたいのが1日2回位ということもあった。」（鹿行、銚田市）

「かつて祖父母が計画・申込した。7・8年前まで潮来ははでだった。100～150人の招待は普通で、200人以上のことも。演出がはででお色直しや引出物も用意した。」（鹿行、潮来市）

「ビジネスホテルなのでそういったことは今ないが、バブルの頃はやっていたときく。」（県南、土浦市）

「ここらでは最近子どもに合わせてファミレスということもみられる。前は50～80人呼んで、結婚式より豪華に祝った。お色直しをしたり、おひねりをもらって子どもがまわったり。子どもが練習してきた挨拶をしたりしていた。」（鹿行、神栖市）

「主に跡取りの長男の七五三で家族・親族・近所を呼んで引出物を引いたり、余興があったりと結婚式並みの内容だった。」（県南、つくば市）

「21年前に建て直し、その頃が一番七五三華やかだった。お昼の宴会で300人以上参加して、結婚式みたいにお色直しもするようなこともあった。」（鹿行、潮来市）

多くが祝いの様子をその呼び名の通り「結婚式のような」「結婚披露宴並みに」といった形で説明している。規模は50～100人、多いと300人以上もということもあり、親・祖父母・親戚の他、「村中の人」「組内」「近所」もよぶのが一般的であったという。祝いの規模は招待客が結婚式並みだけでなく、その内容も結婚式並みである。時には司会者やコンパニオンをよんだりということもあったという。

七五三披露宴のさかんだった時期についての自由回答には、「以前は」「昔は」「かつては」の言葉が並ぶように、今利用があるところは1ヶ所のみであり、大体は5～10年程前まででみられなくなったという。回答を整理すると、ピークは20～30年程前であったといえる。

これらの「七五三披露宴」では、祖父母が中心になって執り行なっていたと回答するものが多くみられた。「かつては祖父母が計画、申込」「祖父母がしきる形で」「昔は祖父母が先頭に立って」という。以前と比較しながら、今は親が中心だとする回答もみられた。

また、祝いの対象となったのは現在一般的な7・5・3歳というよりも、跡とりという位置づけの長男や長女が7歳になった時に他の兄妹も一緒にということが多かった。つま

り、兄妹全員の祝いが長男長女の7歳の時に合わせて行なわれたということである。第1章で、かつて茨城県でオビトキは7歳のみが多いとしたこととの関連をうかがわせる。

本調査より、「七五三披露宴」が特に鹿行・県南において多く実施され、20～30年前がピークであったこと、またその内容等について確認することができた。「七五三披露宴」について、今の七五三と比較しながら説明することがみられることから、実施されていた地域では特殊な例であったというよりも、七五三の一般的なイメージの1つとなっていた様子がうかがえた。

第5章 考察

郷土史を中心にした資料整理、業界誌の記事分析やホテル・旅館への質問紙調査を通じて、茨城県における「七五三披露宴」について、次のことを明らかにすることができた。

「七五三披露宴」は、それまで自宅等で実施されていた七五三（オビトキ）の祝いが外化し始める昭和40年頃からその兆しが見え始め、昭和60～平成7年の間をピークにして、その後縮小、現在はほとんど実施されていないこと、さかんだった頃「結婚披露宴並み」の祝いの内容であったことがわかった。またさかんだったのは、鹿行、県南を中心とした地域であった。

昭和60～平成7年という時期は、いわゆるバブル景気とよばれる好景気にあたり、先の業界誌記事からも、この時期宴会部門、その中でもとりわけ結婚式や披露宴の需要が高かったことがわかった。そういった中で結婚披露宴に類似した盛大な七五三の祝いの形が、茨城県の限られた地域でみられたのはなぜだろうか。

理由として考えられるのは、郷土資料やホテル・旅館への質問紙調査の回答にあった、この地域で以前からみられたイエの代替わり、隠居慣行であるシンショウワタシである。シンショウワタシは、跡取りが家業の経営能力を身につけ、社会的地位も出来上がってきた、結婚後10年頃を目安に実施されることが多かった。この時期は一番上の孫が就学を迎える7歳頃と合致することからか、七五三・オビトキと関連付けて語られる説明が多くみられる。父系の直系家族の繁栄と維持を目的として行なわれると考えられ、古くは大間知篤三によって全国的な隠居慣行の6タイプの一つ「北常陸・磐城型」に分類された。²¹⁾しかし、一方で東北に加えて関東北部の茨城県では、これとは一見矛盾する長女が家を継ぐ形を取る姉家督制度が広くみられる。男児がなかなか生れない時などに、長女が跡を継ぎ、家督相続するしくみである。これは、慢性的な労働力不足に悩まされる環境条件から、確実な跡取りの確保、労働力の早急な補充等の必要から生じた仕組みとされている。²²⁾ 現在

も、鹿行や県南等七五三の盛大な祝いを、男女関係なく先に生まれた子どもの7歳の時のみ実施することからは、このこととの関連性が感じられる。

ところで、シンショウワタシのようなイエの代替わりの慣行は、他地域でもみられたものであり、この慣行の説明だけでは茨城県の鹿行・県南を中心とした地域に限定してこの現象がみられたことは説明できない。

「七五三披露宴」は先述したように、その中心的な要素として社会に向けられた承認や披露があり、そういったものを可能にする、あるいは必要とする条件がこの地域にあったと考えられる。背景として、常総台地、鹿島台地などを含む本地域における農林業の卓越があり、例えば第一次産業人口の変動がみられ始めた昭和40年代も茨城県全域では50%近く、鹿行・県南ではさらに70~80%の高率であったことがあげられる。²³⁾ これらの地域でも全国平均同様第一次産業人口は減少していくが、戦後の地域構造の変化のテンポはゆっくりとしたものだったといえる。つまり、地域の人々の間の関係が従来を長く保っていたといえる。

一方「七五三披露宴」の場であったホテルや旅館の動向をみるならば、茨城県では昭和53年の成田空港開港、昭和60年の筑波万博開幕と関連した数回のホテル・旅館建設、増改築ラッシュがあった。先述の業界誌記事からも、好機を逃すまいと奮闘する地元つくば市や土浦市のホテル・旅館側の動きが報告されていた。この両市は図5に示されているように、「七五三披露宴」が多く実施されていた地域である。両市を含む周囲の地域は、高い農家率を維持してきた地域でもあり²⁴⁾、盛大に七五三を祝いたい側とその場を提供したい側の利害が一致し、「七五三披露宴」への実施につながったとする流れを導き出すことができる。

また「七五三披露宴」が昭和60~平成7年に特に盛んだった事実に注目したい。この時期はホテルや旅館で結婚式が盛大に行なわれていた時期であり、仲人を立てて家同士の結びつきを強調するなど、婚礼には家の継承・繁栄の意味も込められていたといえる。そういった「家の祝い」といった意味合いは、シンショウワタシと関連付けられていた七五三とつながり、当時の結婚披露宴にみられた現代的で奇抜なやり方をそのまま自然に取り入れさせたのではないだろうか。

以上の考察を整理すると、昭和40・50年以降、儀礼の場がホテル・旅館へと外化していった流れの中、農業を中心とした地域構造が維持されていた鹿行・県南等茨城県の南部地域では、七五三において地域に向けて盛大に披露するという要素が長くみられた。その中、同地域の社会的ニーズから旅館業が著しく発展し、盛大な宴会を実施しやすくなったと同時に、宴会場をもつホテル・旅館からの働きかけもみられるようになっていった。そして、

80年代以降の盛大な結婚披露宴のイメージがそのまま七五三にも活用されたといえるのではないだろうか。

昭和60～平成7年をピークに「七五三披露宴」が縮小、みられなくなったことについては、地域社会との間の承認や披露の必要性が、この時期を境にみられなくなったことを示唆している。地域の大きな構造変化が、この時期に完了したといえるのではないだろうか。

おわりに

本論稿では、顕著な地域性を示す茨城県の七五三について、特に「七五三披露宴」に注目してその実態と背景について把握し、またそのことを通じて現代の七五三理解を深めることを試みてきた。

昭和40年代までオビトキといわれていた七五三は、特に茨城県の南部においてさかんに実施されてきたことがわかった。興味深い点として、現代に至るまで祝いは長男か長女、先に生まれた方の7歳の時に、特に盛大に実施する傾向がみられる点であり、こういったことがイエの代替わりや隠居慣行との関係を示唆している点である。「七五三披露宴」を可能にさせた要因として、このようなイエに関する地域社会の慣行が基盤にあったことと併せて、その基盤を戦後も維持させてきた地域構造のゆっくりとした変化のペースをあげることができるだろう。この他、1960、80年代にみられたホテル・旅館の建設ラッシュによる宴会場の増加が、「七五三披露宴」を実施しやすくし、そして促すことにもなっていったと考えられる。

現在全国的に類似の形で行なわれている七五三ではみられない、社会に向けた承認や披露という要素を「七五三披露宴」の中に見出すことができたが、かつて特にさかんであった鹿行・県南でも現在はみられなくなっている。近年『茨城新聞』でもその年の七五三の概況を知らせる記事はみられなくなり、七五三から対社会的な要素が失われてきている。

ところで、現在の七五三全般の利用について、「件数はかわらないが規模が小さくなった」と回答するホテル・旅館にとって、七五三は縮小傾向にあるものと考えられている。今回の質問紙調査の中で、七五三について現在宣伝活動をしているかという問いに対して、何かしらの取り組みをしているとしたのは、ごくわずかであったことから、現在そして今後の七五三に対する期待の薄さを感じさせる。

しかし一方で、水戸や笠間など近くに著名な神社があるホテル・旅館では、件数が増え、七五三フェアなどを開催すると手応えを感じるという話もきくことができた。筆者がこれまで東京都内を中心として実施してきた現代の七五三に関する調査では、社寺参拝の要素

(多くの場合信仰によるものではない) がなくてはならない重要なものとなっていることがわかった。今までは親戚や近隣の人などへの披露が重要だった状態から、現在は東京同様社寺参拝が儀礼の重要な要素となり始めているのだろうか。

本稿ではいくつかの興味深い結果を得たが、いずれもさらに深めていかなければ詳細な理解は得られないだろう。今後同じく「七五三披露宴」がみられるという茨城県と接する千葉県の一部の状況も併せてみていきたいと思う。

謝辞 本稿におけるホテル・旅館七五三調査は一般社団法人全日本冠婚葬祭互助協会の第16回社会貢献基金助成事業からの助成を得て実施いたしました。この場を借りて御礼申し上げます。

注

- 1) 田口祐子「儀礼参加者に聞いた現代の七五三」『現代の産育儀礼と厄年観』岩田書院、2015年、p158-219
- 2) 前掲1)
- 3) 色川大吉「『昭和史 世相篇』の構想」『日本民俗文化大系』第12巻、小学館、1986年
- 4) 茨城県でみられる「七五三披露宴」については近接する千葉県でもみられるというが、調査実施可能範囲ということで、茨城に限定して調査を実施した。
- 5) 旅館業法ではホテルと旅館はいずれも旅館業（宿泊料を受け入れて人を宿泊させる営業）とされ、そのうちホテルは洋式の構造を持ち、旅館は和式の構造を持つものとして区別されている。
- 6) 山口恵一郎編著『日本図誌大系 関東Ⅱ』（朝倉書店、1972年）と、金原左門他『茨城県の百年』（山川出版、1992年）参照。
- 7) 藤田稔『茨城の民俗文化』茨城新聞社、2002年、p399-428
- 8) 郷土史は民俗についての記述がある以下の地域の市町村誌を参考にした。大子町、十王町、常陸太田市、水府村、山方村、大宮町、東海村、小川町、内原町、玉造町、鹿島市、麻生町、潮来市、波崎町、八郷町、新治町、土浦町、阿見町、東町、牛久市、龍ヶ崎市、藤代町、大和村、明野町、下妻市、水海道市、三和町、総和町、猿島町、境町、岩井市。
- 9) 他に「シンショワタシ」「シンショユズリ」「シンショをまかす」「ダンナをゆずる」などの言い方がみられるが、ここでは「シンショウワタシ」と総称する。
- 10) 久家けい子『今泉の年中行事』公益財団法人いばらぎ文化振興財団助成、2013年、p75-76
- 11) むらき数子「いきる・くらす—高度経済成長と暮らし—」『三和町史民俗編』2001年、p290-291
- 12) 桜井武雄「茨城の生活風土-冠婚葬祭簡素化の歴史を顧みて」『農村計画資料』1、茨城県田園都

市協会、1977年

- 13) 他に「合同七五三祝い」「合同祝い」等名称あるが、この名称が最もよく使用されていた。
- 14) 『総和町史民俗編』2005年、p528-532
- 15) 柴田書店発行、発行部数52000部のホテル・旅館業界専門誌。
- 16) 茨城県の全世帯のおよそ11%が購読する茨城県内向けの地方新聞。ここでは昭和40年以降の11月3日、13～16日の記事を対象とした。
- 17) ホテル・旅館の事業は、「客室」「料飲」「宴会」の3部門に分けられるという。このうち、「客室」部門は得られる利益や可能なことに限界があるのに対して、「宴会」部門は工夫次第で様々なことが可能であり、短期間に利益をあげられるメリットがあるとし、事業を左右する重要な部門とされる。
- 18) この頃全国の互助会系式場では、シェアを拡大するにあたって「七五三祝い」「成人式祝い」「法要セット」といった商品を開発し一般化していった。
- 19) 全国約27000のホテル・旅館の宿泊や国内ツアー、高速バスなどを予約できる日本最大級の総合旅行予約サイト。
- 20) ここでは、夫婦（または父親か母親）とその未婚の子どもをさす。
- 21) 大間知篤三『常陸高岡村民俗誌』刀江書院、1951年
- 22) 森謙二「姉家督相続についての一考察」『法社会学の課題』有斐閣、1979年、p117-234
- 23) 総務省統計局『国勢調査』2017年
- 24) 『講談社版 日本の文化地理 第4巻 茨城・栃木・群馬』講談社、1971年、p41-44